

# 島の営みがつまつた民俗資料館

— 沖繩・小浜島

八重山諸島のいくつかの島には、地元住民によって開設された私設の民俗資料館がある。そこには、島の今と昔の暮らしがギュッとつまっている。



## 過去と現在を橋渡しする秘策

一〇の有人島からなる沖縄県八重山諸島には、博物館の原型ともいえる私設の民俗資料館が点在している。石垣島の南嶋民俗資料館、竹富島の喜宝院蒐集館、小浜島の小浜民俗資料館、与那国島の与那国民俗資料館がそれである。日本の近代型博物館が明治の転換期において教養豊かな市民へと国民を啓蒙する目的で創設されたのに対し、八重山諸島のこれらの資料館は、戦後の激動する時代に対する戸惑いや島の将来に対する不安感を背景に、自分たちの歩んできた歴史・民俗を再現し保護する目的で開設されたという点で、同じモノの展示空間といえどもそのベクトルは大きく異なる。

八重山諸島の中心に位置する人口およそ五〇〇人の小浜島に佇む小浜民俗資料館もそうした私設資料館のひとつだ。同館は教員を定年退職して帰郷した慶田盛正光氏の手により、「生きた学習の場、そして語らいの場、文化の伝承の場、ふるさと再発見の場、そして新しい活力を生み出す場にした」との願いで一九八七年七月に開設された。だが、現在まで秘祭が執りおこなわれ、門外不出の民俗事象が多いこの島での開設はそう容易ではなかったことが推察される。そうした特殊な事情を押してまで資料館開設に動いた背景に、島の文化的窮状に対する強い危機感があった。当時の小浜島は、島の四分の一の土地に本土資本のリゾートホテルが開業し、観光化の只中。復帰前後からリゾート開発に異を唱えていた正光氏にとって、資料館の開設は過去と現在の橋渡しをし、島の変貌に抗するための秘策であったといえよう。小浜資料館はそうした島への熱い思いが凝縮して創出された場所なのである。

## 私設資料館の醍醐味

夏には一日二〇名前後の観光客が訪れる館内には、農具、民具、衣装、調度品、仮面、儀礼の写真、屋判の一覧表等約三〇〇点が展示されている。その多くは館長やその親族が使用してきたもので、現館長が館内で愛用している「木の枕」もかつてその母親が使用し、今日その製作は困難な貴重な品だ。だが、展示品ひとつひとつにそうした解説が添えられているわけでもなく、パンフレットが用意されているわけでもない。お膳立てされた博物館に慣れている訪問者にとっては驚きを禁じえないであろう。しかし、そうした驚きはグツと呑み込んで頂きたい。なぜなら、私設資料館の魅力はそこで来客者を持つ館長その人にあるからだ。彼らは島の歴史の代弁者でも文化の翻訳者でもなく、島の歴史や文化そのものである。それゆえ、館長が訪問時におこなっている作業に島の営みを感じし、あるいはその手を休めて説明してくれる、モノをめぐる記憶や経験から島の歴史を伺い知ることに私設資料館の醍醐味がある。

## 機を織り、来館者を持つ

小浜民俗資料館の扉を開けてまず目にするのは、正光氏の亡き後、館長として館を切り盛りしている妻の英子さんが機織りをしている姿であろう。彼女は館内に織機を五台設置し、時間が許す限りそこで機織りをしている。彼女が制作しているのは親戚の着物である。「行事の島」と評されるほど年中行事が盛んなこの島では、着物を身につけていなくては行事に参加できず、とりわけ男性の参加にはクンズンと称する限りなく黒に近い藍色の着物をつけることが必要不可欠である。女の手によって染められ、女の手によって織られた着物。それが、島を離れて暮らす子どもや孫を島に繋ぎ留め、秘祭を含めた年中行事の維持存続に一役かかっていることはいまでもない。館長自身も「織りだけはよその島ではできない」と自負し、一夏に五、六反を織り上げる。祖先がおこなってきた営みを受けとめ、自らの人生をそこに重ね合わせている英子さんの姿に、小浜島の人びとの今のくらしの縮図を見てとれよう。

この夏、もしも八重山諸島を訪れる機会があれば、是非とも私設の資料館に足を運び、島を愛する館長と話をし、その人となりに触れて欲しい。彼らの人生とモノとが交錯した話に、今まで見えなかった島の別の姿が立ち現れてくるはずだ。そして、時間が許す限り、島ごとに個性豊かな彼らが誇る年中行事を見て頂きたい。きっと、あなたも立派な「八重山フリーク」になること間違いない。

加賀谷 真梨  
民博 機関研究員



秋におこなわれる結願祭(ケツガンサイ)。手前に座る男性らが身につけているのがクンズンである



機織りをする現館長の英子さん



盆行事のようす。子どもから大人まで島の女が織った着物を身につける



資料館に展示されている着物。行事や年齢、性別によって着るべき着物が定められている



アサイ(民家の離れ)を利用した民俗資料館